

【解説】

「人間」らしく やりたいナ

新船海三郎

「この大学にも芥川賞などというものをもらう人間がいるもので、開高健という者が出た。彼は僕のゼミの出身だと吹聴しているらしいけれども、僕は残念ながら彼を教えた記憶がない」

のちに大阪府知事になった黒田了一さんからそんな話を聞いて、もう六〇年になる。大学に入ったばかりのころだった。教養時代の「法学」か「憲法学」の授業だった。「秋の夜をひたすら学ぶ六法に恋という字は見いでざりけり」などと自歌を披露しながら、黒田さんは楽しそうに「カイコウケン」を語ってくれた。

私が開高健を読み出したのはそれからである。

故・浦西和彦氏の詳細な開高健年譜によっても、開高が黒田ゼミ生だったことは確かめられない。というより、年譜は一九四九年六月の大阪市立大学法文学部入学と五三年一二月の法学部（学部分離）卒業は記していても、成績まで紹介した天王寺中学時代のような、立ち入った学生生活はたどっていない。盟友の谷沢永一や妻の牧羊子、また自身の小説、エッセイなどからもうかがえるが、

開高はそもそも授業というものに出た形跡があまりない。

戦時中の一九四三年、開高は天王寺中学に入学しているが、直後に父親を亡くして家督を相続した。戦争が終わると農地解放で福井県にあった田地がすべて取り上げられ、開高の背には家計がずしりとかぶさつてきて、授業に出るどころではなかった。大学に姿を見せるのは奨学金の支給日だけというほどだった。なにせ、八時間働いても割のいいアルバイトで五〇〇円という時代に、奨学金は月二〇〇〇円だった。

開高はもっぱらアルバイトにいそしみ、同人誌『えんぴつ』（当初は新日本文学会大阪支部だったがすぐに谷沢永一主宰になる）で知り合った詩人の牧羊子との生活に追われた。「青い日曜日」や「矩形の療養地」で描いた、「偽学生」と自嘲する時代だった。後年、大学は何学部だったのかとしばしば問われて、「アホウ科ですねン」とうるさそうに答えた話が残っている。

学生でありながら学生でない、家長でありながら母と妹を置き去りにして家庭を持つ、陽気にいきたいがそうはなれない陰鬱……、開高の二律背反は思弁の産物でなく、こうした生活から身についていた。アンビヴァレンツによつてものごとを認識せざるを得なかった。明晰と混沌、均整と乱脈、静謐と喧騒、壮麗と醜惡、昂揚と失墜、覚醒と泥酔。さらに、希望と絶望、饒舌と沈黙、微笑と呻吟、悲鳴と諧謔、居傲と卑屈、自恃と無恥……。ひとつの事柄にはかならず両面があると考えた。

あるいはそれは、生活から身についてただでなく、戦争中に鼓吹、強制、謳歌された「正義」のあえない失墜と、それを目のあたりにした手のひら返し「正義」の無頼を見たことに拠っているかもしれない。もちろん、背反対立した二項ではなく、「正義」の裏にべつたりと悪・非道・不義が貼り付いていることを承知のアンビヴァレンツである。

本書には、そうした開高健をよく映した傑作七編を集めた。開高を一躍注目させた「パニック」、芥川賞受賞の「裸の王様」、ヒトラーとナチスの所業に思いを重ねる「屋根裏の独白」「森と骨と人達」、ベトナム戦争に材を得た「岸辺の祭り」「洗面器の唄」、そして、中国文化大革命に命を絶った老舎を描く「玉、碎ける」。いずれも、心の底を痛打してくるものばかりである。なぜこの七編か、と問われれば、戦争へ流れていく今日た дайまの日々を絶つため、と私は答えたい。

「パニック」は、「木曾谷ネズミ騒動記」という「朝日」夕刊記事（一九五七年二月一八日）をヒントに生まれた。「毎日」文芸時評で平野謙が絶賛し、注目された。一二〇年周期ともいわれる笹の実の大豊作によって野ネズミが大発生し、山林を食い尽くし集団移動する顛末と、それにからむ役人たちの右往左往を乾いた目で捉えている。

主眼は、「集団的自我のダイナミックス」（頁の背後）とのちに開高が整理したが、アジア太平洋戦争末期のサイパンで起きた断崖からの集団身投げに、野ネズミの恐慌を重ねて捉えるところにある。作中にこうある。

「この狂気の説明はまだついていない。正しい条件において観察すればネズミは臆病で神経質なうえ、手におえないほど多産で、感覚もまたかなり高度に発達した、利口な動物である。一度食った毒ダングは二度と食わないという分別もあるし、かじる木の種類もふだんはちゃんと区別している。彼らの美食趣味はどれほど一つの林にまじって生えていても信州カラマツと北海道産カラマツを潔癖に選びだして信州産の木にしか手をつけない。そんな敏感さや神経のゆきとどきが、ただ飢えからのがれるために集団化したというだけでどうして失われてしまうのか。集団のどんな生理が個体

の内容を変えてしまうのか。また集団は一匹一匹のネズミの集まりではなく、食料不足のためにたまたま発生した、動物図鑑にかつて掲載されたことのない多頭多足の一匹の巨獣として理解すべきなのか」

サイパンの、バンザイクリフと呼ばれる地での悲劇は、同様の強いられた死として、沖縄にも樺太にもあった。インパールでもレイテでもあった。開高が問おうとしたのは、人間をもまた、「集団の衝動におし流されて彼らは正常な味覚や嗅覚を失い、遙かかなたからでも海の匂いを死の予感として判断できなかった」野ネズミの集団化然とさせたのはだれか、そのように進んだ日本という国はなんとという国か、であった。

その問いからすれば、文学的仮構としても「集団的自我のダイナミックス」に抗する「人間」を描かなければならないところであったが、開高も自覚するように、それはできなかった。「やつぱり人間の群にもどるよりしかたないじゃないか」と重石のように呟いて作品を閉じた開高の心中は穏やかではなかったろう。とはいえ、ここで「人間」ではなく「人間の群」としていることには注意が必要である。開高はこの作品発表から少しして、トリスウイスキーの広告をこう書いた。

「人間」らしく やりたいナ／トリスを飲んで「人間」らしく やりたいナ／「人間」なんだからナ

むつかしい問題ではあるが、「人間」を「群」に解消するな、といっているように私には聞こえる。「人間」であることを所与のこととせず、「人間」であることとはどういうことであるのかを問い、「人間」らしくあろうとするものだけが辛うじて「集団的自我のダイナミックス」と距離を置けるのだとでもいいたいのだろうか。トリスを勧めながらの問いは飲み下すには重いものがある。

「裸の王様」が問うのもそこにあると私は思う。正しく、優秀というある種の型に押し込めて子を育てる愚かしさは、上を見、横を見ておのれの位置を定め、それを自分の個性に見せかける薄っぺらな「人間」しか生まない。そうした彼や彼女たちは、「集団的自我のダイナミックス」でさえわが個性にしてみようだろうという痛烈な皮肉は、そう読めば読むほど開高の心底を覗き見した気になる。

もちろん現代の戦争は、たとえばかつてのベトナム戦争のようではない。「洗面器の唄」にあるような、前哨陣地で家族ぐるみ暮らすなどということはあり得ないだろう。しかしあのころのベトナムでは、「常民も難民も誰ひとりとして洗面器を暮しと日と時間と季節の核にしないものはいない。十人のうち九人は時計も眼鏡も持っていないが、十人のうち二十人は洗面器をかかえている」「ナパームか銃撃戦で追いだされた農民たちは、燃える小屋をあとにして、はだしで逃げだしてくるけれど、誰でもきつと洗面器一つは持っていて、道ばたにそれを置くと、その場で暮しがはじまる」という「洗面器」は、まちがいに戦争を象徴していた。

戦争が日常であるのか、日常が戦争であるのか。それは言葉の順の問題でなく、ここでは一体のものであって、重要なことは、それが本来の戦争であると語っていることだろう。顔を洗い、煮炊きをし、洗濯をすれば体も洗う「洗面器」は、平々凡々とした日常を語るにもっともふさわしいものといえる。であるのなら、それを背にくくりつけて陣地移動し、ついたところでやおらそれで飯を食うという光景は、それもまた平凡な日常といわなければならない。「たぐまった」などという死語に近い大阪弁がひょいと無意識に顔を出すのも、開高にはそこが日常としか映らないためだと思う。

戦争とは、悲しいまでに日常である。いや、日常になる。否、日常にさせられる、のである。悲嘆をいつそう深くするのは、そのとき自分の進む道と方向を自分では選べなくされていることである。洗面器はつねに戦場にありつづける。堅固な日常として。

であるならば、私たちは日常をこそ一つの足がかり手がかりにして、「人間」らしく生きなければならぬ。しかし、そうはいってもこれまたむづかしい命題である。

ナチスのホロコーストの現場であるアウシュヴィッツを見学に行く旅をえがいた「森と骨と人達」は、「人間らしく」生きることの意味、あるいは至難を語りかけてくる。アウシュヴィッツを訪問したあと、開高とおぼしき「私」はワルシャワに戻ってくる。が、「いつも何か異常なもの」の気配を感じる。

「あそこでは、人間が物質資源でしかなかった。切りとられた髪はカーペットになった。人体を焼いたあとの灰は肥料として農家に売られた。焼くときにでる脂肪からは石鹼がつくられた。金歯は釘抜きでぬかれ、とかれてインゴットにしてベルリンに送られた。どこにもぬかりがない。むだなものはどこにもない。…略…私があやふやな言葉をただ一つのたよりにして、買ったり、飲んだり、歩いたり、笑ったり、握手している、そのすぐうしろ、のろい汽車で七時間かかるかからないかの場所に、その世界がある。物だけの世界がある。影大な量の、老若男女の髪が、ガラス室のにぶい、蒼白い蛍光灯のなかでピラミッドをなしてそびえ、夜や昼や会話となんの関係もなく形を失ってからみあっている。その山の気配はまぎれもなく、私がさしだしたり、ひっこめたり、にぎったり、ひらいたり、ふったりしている腕や肩のあたりに執拗にからみついてくるのである」

開高はデリケートな男である。過ぎるのもいいほど繊細である。しかし、だからこう感じ

るのでは決していない。「日本人には南京虐殺、アメリカ人には朝鮮戦争、フランス人にはアルジェリアの残虐行為がある」。しかしあそこは、比較しても比較にならぬ冷酷無比と云っていい悪魔の所業、いや、「人間」の仕業である。

これを、芸術的才能も、ことをなし遂げる持続する意志も持たない若者が国家を乗っ取ってやってしまった。「屋根裏の独白」を社会と人間への呪詛・怨嗟の言葉と聞くなら、現代に投げかけてくるものを捉えることもできるだろう。人間を「物質的資源」にしてしまう「人間」の芽は現代社会にも無縁ではない。

老舎を描いた一編は、これぞ短編、これぞ開高ともいえる名作と思う。日本の侵略に身を挺してたたかい、言葉を縦横につむいで抵抗した老舎も、文化大革命の紅衛兵の前では無力無慚だった。知識人というだけで糺弾されねばならない「革命」とは、いったい何なのか。文化大革命に賛意は示せず、といって反論すれば死。おそらく老舎は、どちらでもない話を延々とつづけたことだろう。大好きな北京の街であつたか、それとも「駱駝祥子」を語つたか。思いを延ばせば涙が出てくる。「集団的自我のダイナミックス」といえる紅衛兵たちには、残念ながら通じなかつただろう。垢のこすり滓の団子、つまりは個々の人間を持たぬ有象無象をいくら集めて丸め、固めても、所詮は粉々になるしかないものである。開高は、老舎という珠玉の死を送りつつ、狂気の毒団子の末路をも示唆して作品を閉じた。

私は、〈「人間」らしく やりたいナ／「人間」なんだからナ〉とつぶやいてみる。

(しんぶんかいさぶろう・文芸評論家)